

到津の森公園 散策を終えて(公園訪問記)

「座談会」編集担当委員
伊津信之介

筆者が福岡県に転居して15年にもなるが、到津遊園や到津の森公園を訪れる機会もなかつたし、詳しく知る機会もなかつた。ところが「むなかた電子博物館」紀要第3号の座談会「社会教育施設としての水族館」(マリンワールド海の中道館長 高田浩二博士を囲んで)で対談をしていると、社会教育施設としてのマリンワールド海の中道が思想的に到津遊園(到津の森公園)や北海道の旭山動物園などに通じるものがある事に気がついた。

2011年12月に開催された、「むなかた電子博物館」紀要第4号の第1回委員会で座談会を到津の森公園岩野俊郎園長を囲んで行なうことを提案し、採択された。その理由は、中央公論新社「戦う動物園—旭山動物園と到津の森公園の物語」で扱われた到津の森公園が、地域の力で閉園から復活したこと及び旭山動物園と到津の森公園の交流などについて直接岩野俊郎園長に伺いたいということである。とりわけ社会教育の役割が強い「むなかた電子博物館」にとって、到津遊園から到津の森公園へと引き継がれた「林間学校」を通して社会教育が実践され、北九州市民の強い要望となって到津遊園から到津の森公園開園に至るドラマを座談会で浮かび上がらせたいと考えた。



地形を生かした園舎の立体的配置と平面的配置が見事だ



こここの山羊は餌を求めて野生のように岩山を登り走る

年の瀬も押しつしまった2012年12月28日、編集委員総勢10名が到津の森公園を訪れ、まず岩野俊郎園長の案内で園内を1時間にわたって散策した。事務棟3階を出たテラスでは猿の吠え声が盛んに響くが、その園舎は見通せない。植物園のようなアプローチで隣りの園舎が見えない斬新な展示方法を実感した。それぞれの園舎を彩る木々についての並々ならぬこだわりも印象的だった。いかにして野

生状態の動物の活動を見せるかという取組みも随所で解説された。集団を好む動物たち、個別に生き抜く動物、それぞれに相応しい園舎が次々に現れ、園内路には北九州の季節を表す草木が巧みに植栽されていた。



池の噴水を指しながら公園の夜間照明について話す岩野園長

散策の終わり頃、到津遊園から到津の森公園へ続いた林間学校の開催された野外ステージも拝見した。そして夏の夜間開園には是非また来て欲しいという岩野俊郎園長の話しを遮って会議室の座談に臨んだ。岩野俊郎園長は到津の森公園のありとあらゆる事を理解してもらうという強い熱のこもった話しが特徴的だ。座談会を進行する立場の私は、頃合いを見計らって次の話題、次の質問に移ろうとしたため、つい話題を誘導してしまったところもある。

話し言葉が文字になると、その場の状況が失われることと合わせて、意を尽せない部分が生じるようになるので、これを補うため、録音を宗像市堀さんにお願いして文章化した。その原稿に伊津が目を通し、見出しをつけたりといった若干のリライトを行ない、岩野俊郎園長にも目を通してもらい修正を加えた。

写真は、Jose Domingo Cruz 氏の撮影である。

参考図書：

戦う動物園—旭山動物園と到津の森公園の物語

小菅 正夫, 岩野 俊郎

中央公論新社

ISBN-13:978-4121018557